SEQUIMINI ME

セクイミニメ

No.42

SPRING 2012

桃山学院大学チャペル・ニュース

目　　次

巻頭言「自分とご両親の誉のために」……　チャプレン　松平　　功　……　1

先輩からの便り「桃大生活は神様からのプレゼント」
第25期生　湖城（こじょう）　修（おさむ）　……　2

＜キリスト教センター関連等諸行事＞（2012年1月～2012年3月）……　4

チャペル献金報告　……　5

聖書の花園（25）「大麦―五千人の供食にも」……　金城　盛紀　……　6
（当大学元文学部教授・神戸女学院大学名誉教授）

～ オルガン講習・感想文 ～　……　8

(1)「チャレンジし続けた1年間」　法　学　部　4回生　宮本　伸隆
(2)「パイプオルガンと向き合って」　国際教養学部　4回生　林　　千鶴
(3)「達成感と感動を得られるパイプオルガン講習」　国際教養学部　3回生　神野亜沙美
(4)「パイプオルガンの音色」　国際教養学部　3回生　定　友里亜
(5)「パイプオルガンに触れて」　社会学部　3回生　番匠　祐貴
(6)「オルガン講習を受講して」　経済学部　3回生　樋口　真帆
(7)「成長のド・レ・ミ」　国際教養学部　3回生　東道　捺希
(8)「パイプオルガンとの出会い」　国際教養学部　2回生　村川　勁剛
(9)「パイプオルガンと私」　経済学部　3回生　山本麻梨子

聖書の言葉

「我々は主を知ろう。主を知ることを追い求めよう。主は曙の光のように必ず現れ
降り注ぐ雨のように　大地を潤す春雨のように　我々を訪れてくださる。」
（ホセア書6：3）

表　紙

桃山学院大学チャペル

撮影：学校法人桃山学院

「自分とご両親の誉のために」

チャプレン（大学付牧師） **松平　功**

「父親を敬うこと、これこそ人間の栄誉なのだ。母親を侮ること、それは子供にとって恥である。」
（旧約聖書続編、シラ書（集会の書）3章11節）

新入生の皆さん、ご入学おめでとうございます。どうぞ、本学の自由な雰囲気に早く溶け込んでください。また、在学生の皆さんも意気揚々と新たな学期をスタートしてください。

大学は高校と違い、履修科目をはじめ、ゼミ、サークルや課外プログラムなど様々なことを自分で考えたり探したりしながら決めていかなければなりません。そう言う意味において、自立していくということが大学生活の重要な課題となります。そのような本学での4年間の学生生活の間に、社会に羽ばたいて行く準備をすることになります。高校生の時の規則的な授業形態とは違って、大学では何事にも強制されず自主的に履修科目を修めていくわけで、それはある意味、自分との戦いであると思います。そこでまず知っておいていただきたいことは、大学の自由さに振り回されてしまい、自立するよりも自堕落な生活に陥りやすいという危険性があるということです。残念なことですが、毎年5人に一人が留年しているという事実はそのことを物語っています。この自由という誘惑については、在学生は経験上よく知っているはずです。そこで、健全な大学生活を営んでいくためにお薦めする心構えがあります。それは、自分のためだけの大学生活であると考えず、ご両親のためでもあると考えることです。自立は親離れの第一歩と言えますが、ご両親との決別という意味ではありません。今まで立派に育ててくださったご両親の恵みがあるからこそ大学まで進学できたのです。そのご両親を敬い感謝を持ちながら、ご両親のためにも大学で頑張らなくてはならないという思いを持っていただきたいと願います。

日本は「恥の文化」と言われます。皆さんの中には子どもの時に「人様に迷惑をかけないように、恥かかないように」とご両親から諭されて育った人も多いのではないでしょうか。「恥の文化」とは、ルース・ベネディクトが著した「菊と刀」から来ています。確かに、昔の武家社会では、「恥」を最も嫌ったのですが、家に対する世間の目という意味での「恥」を強く意識していたのです。つまり、「恥」とは単なる個人的なものではなく、家族全員で受容するものであったということです。ですから「恥」を一概に人目ばかりを気にする因習と位置づける必要はありません。日本文化の「恥」意識は、親と子をつなぐ絆文化の一つの側面であると言えるのです。この「恥」の逆は「誉」です。日本文化的に見て、子の「恥」は親の「恥」でもあるのですが、それと同じように、子の「誉」は親の「誉」でもあるのです。

新入生の皆さんも在学生の方々も、本学において高い目標を掲げて、それに向かう努力によって自らを磨き、自分のために、そしてご両親の「誉」ためにも勉学に勤しみ、人生でたった一度きりの大学での青春を謳歌していただきたいと心から願います。

先輩からの便り

「桃大生活は神様からのプレゼント」

第25期生　湖城（こじょう）　修（おさむ）

（カリスチャペル福岡・牧師）

私は本学84Sの卒業生です。現在、私は福岡県の筑紫野市でカリスチャペル福岡の牧師をしています。

本学入学前にすでに洗礼を受けクリスチャンとなっていた私でしたが、本学在学中は囲碁部に属していました。キリスト教関係のS.C.A.などのサークルもあり、在学中には知人もありましたが、自宅から遠く通学時間がかかった事から責任ある関わりがもてず所属する事はありませんでした。しかし、在学の4年間は私にとって多くの事を学ぶすばらしい時間であったと感謝しています。今では、本学に導かれた事は神様からのすばらしいプレゼントであった事を確信しています。

特に私の考え方、信仰に大きな影響を与えた事が2つあります。その一つは本校の自由でなんとなくお祭り好きな雰囲気です。内向的で物事を深刻に受け止めるタイプであった私は、マニュアル化されたものには真面目に取り組みそれなりの結果を残す者でしたが、マニュアルの無いチャレンジに対してはどちらかと言えば戸惑っているうちに時間が過ぎてしまいフォローに追われる方でした。しかし、本学在学中に型にはまっていた思考のパターンがある意味「適当」「いいかげん」（もちろん、悪い意味ではなく）に、バイタリティをもって、時には立ち向かい、時にはすり抜ける、心のフットワークの軽さを身につけさせてくれたように思います。所属教会にいても子供のクラスの教師をしたり、キャンプを企画する奉仕を与えられ、予想を越える様々な出来事に祈りながら責任を果たしていく時期とも重なり、マニュアルという枠を越えて、もっと興味と楽しみをもって信仰も人生も生きるように心が開かれました。それはある意味、心の部分、本質、ゴールがぶれなければ、それ以外の部分は自由に対応できるという事を学ばせてもらったのです。

もう一つの事は、本学が力をいれていた差別や偏見に対する問題への取り組みです。特に指紋押捺の問題がクローズアップされていた時期でもあり、定住外国人問題、特に在日韓国・朝鮮人の問題との出会いは、その後の私の生き方を決定付けるものとなりました。以前から私の所属している教会は、韓国の牧師や在日教会との交流が良くなされていた事もあり、中途半端にしか知らなかった歴史的事実を明確に知る事によって自分もこの問題と関わらずに進む事は出来ないと思わされました。在日の学友とも親しく交流を持って、時には公の抗議活動などにも同行する事もありました。

しかし、それがきっかけで自分の立ち位置、

アイデンティティとしてこの世の中の様々な問題に対する関り方を問われる事になったのです。社会運動、社会活動に賛同しないわけではないし、差別を無くすための活動もまた信仰者としての生き方かも知れません。しかし、人の心を支配する悪の力に対して、信仰者である自分は、イエス・キリストの救いと福音を伝える事こそが自分の立ち位置ではないかと考えるようになって行ったのです。言うならば社会運動や啓蒙活動によって一つの問題、差別に対して取り組む事はできるが、根本的な人の罪の心、闇の部分に対しては人間の力だけでは変える事が出来ないという思いが強くなり、私は社会運動の立場ではなく、宗教家、クリスチャンとしての信仰の立場で心の問題に取り組んで行く決心をさせられました。卒業後、私は、流通関係の営業として就職をしましたが、しばらくして辞職し、聖書を学び牧師となる生き方を選ぶようになりました。自分自身の存在の本質を見つめなおす機会が与えられました。

現在、私は牧師の働きの一つと考えホテルなどの結婚式の司式にも行かせていただいています。先日、結婚式を請け負っているイベント会社の方から新しいスタイルを提案するホテル側へのプレゼンテーションをする相談を受けました。長い時間をかけて感動的な結婚式をどうすればできるか話し合いました。音楽や楽器、流れるようなプログラム進行、照明などなど、検討をしました。しかし、私がもっとも強調して提案したのは「本物は何か?」という事でした。美しいドレスも目新しい企画も確かに他には負けず、しかも、他とは違うものが求められています。しかし、もともと日常の生活から離れた「はれの日」は神の前に出る為のものでした。そして、神の前で真実の心を持って誓い結ばれる為であったはずです。普段着ていない服を着、様々な演出がなされて、日頃とは違う自分を演じる雰囲気に酔い、結婚式の本物の部分がぼやけてしまう事が無いようにとお勧めしたのです。本物でなければ、本当の感動を生む事は出来ません。本物の心が必要なのです。

聖書には「私たちは、真理に逆らっては何をすることもできず、真理のためなら、何でもできるのです。」（コリントⅡ 13:8、新改訳）と書かれています。　この真理は「わたしが道であり、真理であり、いのちなのです。」（ヨハネ　14：6）と書かれているようにイエス・キリストや聖書の言葉を現しているのです。しかし「本物の為ならば何でもできる」と受け取る事も出来ます。偽りや見せかけの為に人生をかけるのではなく、本物を追い求めて、全力を注ぐ価値ある歩みをされるようにお勧めします。物事の本質、本物を求めましょう。

最期に私は牧師として本物の神、イエス・キリストを全ての人に見いだして欲しいと願っているのです。

［カリスチャペル福岡］
〒 818-0013 福岡県筑紫野市岡田 2-45-2
TEL & FAX：092-926-6221

＜キリスト教センター関連等諸行事＞（2012 年 1 月～ 3 月）

1 月　6 日	新年賀会（聖バルナバ館 3 階）
7 日	振袖の会（聖ヨハネ館）
10 日	バイブル・ランチ
16 日	秋学期終業感謝礼拝
	長期派遣留学生・海外研修参加学生壮行礼拝
17 日	バイブル・ランチ
	（プール学院大学チャプレン補　フィリップ・フォーブス氏）
	信夫ゼミ　卒業前祝い
18 日	国際ワークキャンプ実行委員会
20 日	チャペル見学（茶山台小学校）
	大学同窓会新年互礼会（なんば・スイスホテル南海大阪）
23 日	秋学期終業感謝礼拝
	交換留学生修了記念式典
	チャペル見学（宮園小学校）
2 月　1 日	キリスト教センター運営委員会
8 日	チャペル見学（大阪府立八尾北高等学校）
12 日	アメリカンフットボール部　2011 年度感謝・激励礼拝
13 日	学生表彰式
14 日	冬期日本語プログラム祝福礼拝
15 日	キリスト教センター運営委員会
24 日	冬期日本語プログラム修了礼拝
3 月　1 日	チャペル見学（大阪学芸高等学校）
12 日	AO 入試合格者対象入学前通学講座開講式
14 日	チャペル見学（大阪府立貝塚高等学校）
16 日	チャペル見学（和歌山県立笠田高等学校）
17 日	卒業記念礼拝
	卒業証書・学位記授与式
	学部成績優秀者表彰式
	聖歌隊学生派遣・祝福礼拝
19 日	チャペル見学（和泉市立青葉はつがの小学校）
22 日	宗教活動協議会
23 日	フレッシャーズキャンプ・学生スタッフ任命式ユニフォーム授与式
26 日	スポーツ推薦入学者激励会
30 日	教職員退職者感謝記念礼拝

～ お 知 ら せ ～

BIBLE　LUNCH のお誘い

学期間中の毎週火曜日、お昼休み（12：40 ～ 13：00）にバイブル・ランチを開いています。昼食を食べながら、聖書やキリスト教のお話をします。どうぞ、友人を誘ってご参加ください。場所は、キリスト教センター集会室です。お菓子や飲物もあります！

チャペル献金収支報告

2012年度 2月 13日現在　チャペル献金収支報告書

【 収入の部 】

チャペルコンサート献金

月・日	金 額(円)
①2011/4/16	65,121
②2011/5/25	44,290
③2011/6/25	28,646
④2011/11/2	36,885
⑤2011/12/10	32,806
計	207,748

結婚記念献金

月・日	献 金 者	金 額(円)
	計	0

特別献金

月・日	献 金 者	金 額(円)
2011年4月5日	東北地方大震災義援金(桃大生協)	37,000
2011年4月5日	環境問題委員会リサイクル・リユース市頒布金(桃大生協)	6,700
2011年5月11日	立教大学、桃山学院大学　アメリカンフットボール部献金	19,000
2011年5月12日	101回チャペルコンサート後(4/18～5/12)献金箱2個分の献金	2,906
2011年5月20日	エイトレント(結婚式貸衣装会社)	24,570
2011年12月15日	クリスマス礼拝献金	23,536
2012年2月8日	クリスマス礼拝後(12/16～2/8)献金箱2個分の献金	950
	計	114,662

普通預金利息

月・日	金 額(円)
2011年8月22日	16
計	16

322,426

収入小計	**322,426 円**
前年度繰越金	**344,592 円**
収入総計	**667,018 円**

【 支出の部 】

2011年4月18日	残高証明発行手数料	525
	計	525

(米)　献金・手数料 内訳

献 金 送 付 先	金額(円)	手数料
5.13桃山学院東日本大震災支援金(2011年度第1回「キリセン」運営委員会	344,000	525
5.13桃山学院東日本大震災支援金(4/5桃大生協東北地方大震災義援金)	37,000	525
5.13桃山学院東日本大震災支援金(第101回チャペルコンサート献金)	65,121	525
6/2桃山学院東日本大震災支援金(第102回チャペルコンサート献金)	44,290	315
7/7桃山学院東日本大震災支援金(第103回チャペルコンサート献金)	28,646	0
11/2桃山学院東日本大震災支援金(第104回チャペルコンサート献金)	36,885	0
12/15桃山学院東日本大震災支援金(第105回チャペルコンサート献金)	32,806	0
12/19桃山学院東日本大震災支援金(クリスマス礼拝12/15献金)	23,536	0
計	612,284	1,890
合計	614,174	

支 出 総 計	**614,699**
通帳残高	**¥52,319**

† 聖公会とは †

私たち桃山学院大学の建学の精神は、「キリスト教精神」（自由と愛の精神）です。教派としては日本聖公会に所属しています。聖公会は、英国宗教改革から始まり、ヨーロッパ、南北アメリカ、アフリカ、アジア、太平洋など世界中の国々に広がり、信徒数７千万人を越えております。このような世界的な組織の中で、日本聖公会は重要な位置を占めています。日本においては約 350 の教会、約５万人の信徒を擁し、キリスト教の宣教活動に加え、さまざまな教育・医療・社会福祉などの事業を全国各地で行っております。

私たちの姉妹校としては、立教、立教女学院、聖路加看護、名古屋柳城、平安女学院、プール学院、松蔭女子学院、神戸国際などがあります。聖路加国際病院、聖バルナバ病院もよく知られています。私たちの大学は、世界に広がる国際的なネットワークの中で、その一員として、「キリスト教精神」（自由と愛の精神）に基づき、「世界市民の育成」をめざして努力しております。

大麦 ── 五千人の供食にも

金城盛紀（当大学元文学部教授・神戸女学院大学名誉教授）

（Wikimedia Commons より）

大麦はイネ科オオムギ属（Barley, *Hordeum vulgare*）で、今日の生産量が小麦、稲、トウモロコシに次ぐ世界第4位の穀物である。前7900年ごろにはイランで栽培され、ギリシア・ローマ時代にはヨーロッパ各地に広まった。中世初期までは小麦よりも重要な主食作物であった。イスラエルの地に祝福を与える7種の農産物の一つで、聖書には32回以上出てくる。小麦より乾燥に強く、播種も穫収も小麦よりは早く始まる。日本でもかつて麦といえば大麦を指した。高さ1.2メートルほどになる1年草。

ルツ記で重要な大麦

ナオミはこうして、大麦と小麦の刈り入れが終わるまで、ボアズのところで働く女たちから離れることなく落ち穂を拾った。（ルツ記2：23）

ナオミは、息子の嫁で異邦人であるルツを連れてベツレヘムに帰ってきた。それは「大麦の刈り入れの始まるころ」（1：22）、という表現で5月の中頃から月末であったことを示している。二人とも未亡人になって暮しは貧しく、ルツが落ち穂拾いをして糊口をしのぐ。しゅうとめナオミに孝養を尽くすルツは、富裕な地主ボアズの厚意にめぐまれ、二人は結婚する。困難な状況に陥っても誠実なルツは報いられる。彼女はイスラエルの王ダビデの曾祖母となり、イエスの祖先の母となる（マタイ1:5）。

このルツの物語に大麦は深くかかわる──時期設定と困窮の状況提示、そして救済充足のきっかけとして。

重要な穀物であった大麦はその播種から収穫の時期が出来事の「時」を告げるのによく使われた（ユディト記8：2など）。

約束さる良い土地の穀物

あなたの神、主はあなたを良い土地に導き入れようとしておられる。それは、平野にも山にも川が流れ、泉が湧き、地下水が溢れる土地、小麦、大麦、ぶどう、いちじく、ざくろが実る土地、オリーブの木と蜜のある土地である。（申命記8：8）

モーセがイスラエルの人々に語る神の賜る約束の地の豊かな食べ物は八つ挙げられるが、大麦は小麦の次に示される。荒れ野の旅で飢えてマナで生きのびたが、神が導き入れようとする地では食べて満足するほどの豊かさが約束される。

飽食の時代、ダイエットに苦労する人にはピンと来ないかもしれないが、食べなければ生きられない人間にとって、「わたしたちに必要な糧を今日与えてください」（マタイ6：11）という主の祈りの一節は根源的な祈りである。「不自由なくパンを食べることができる土地」が約束されるということは、恵まれ祝福されるということにほかならない。当時の民衆が常食にしたのは大麦のパンであった。

民衆のパンは大麦

聖書の時代には大麦は家畜の飼料にもされたが（「馬と早馬のための大麦」列王記上5:8）、

貧しい民衆の主食であった。小麦よりはるかに安かった（列王記下 7：1 では大麦は小麦粉の半価、黙示録 6：6 では小麦の三分の一の価値とされる）。穀物として大麦の重要性が下落したのは、16 世紀ごろになって小麦の生産量が増大してからである。

大麦は貧しい一般大衆の食べ物であり、貧困の象徴にもなった。士師記 7：13 の大麦の丸いパン、列王記下 4：42 の大麦パン、エゼキエル書 4：9 の大麦のパン菓子、ヨハネ 6：9 の大麦パンなどその例として挙げられる。「大麦パンも食べられない」という表現は極貧を意味したという。首相にもなった政治家の「貧乏人は麦を食え」発言も思い出されるが、大麦は健康食として見直されつつある。

小麦の代わりに茨が生え
大麦の代わりに雑草が生えてもよい。
（ヨブ記 31：40）

ヨブは悪事を働いたことはないのに、故なき苦しみに襲われる。もし仮にあったとすれば、いい暮らしをしている人々が食べる小麦も貧しい大衆の食糧となる大麦も奪われる罰を受けるにやぶさかでないと言う。二種類の麦を区別しているのはあらゆる人々の穀物という意味が込められていたと思われる。

いなごによる荒廃を嘆くヨエル書のくだりも同様であろう―― 「小麦と大麦、畑の実りは失われた」（ヨエル書 1：11）。

五千人供食のパンも大麦

イエスがガリラヤ湖の岸で五千人に食べさせたパンも大麦パンである。この供食の話は 4 福音書に共通する唯一のイエスの奇跡である。

「ここに大麦のパン五つと魚二匹とを持っている少年がいます。けれども、こんな大勢の人では、何の役にも立たないでしょう。」
（ヨハネ 6：9）

アンドレがイエスにこう言った。しかし、大麦のパン五つと魚二匹でおよそ五千人を満

（Wikimedia Commons より）

腹にしてパン屑もたくさん残った。人数についてヨハネだけでなく、マタイ、マルコ、そしてルカの並行記事も「男五千人」と記している。田川建三は、詳細な注で古代ギリシア語では「男」という語の複数形は男女を区別せずに、英語の「men」がそうであったように、単に「人々」を意味したと強調している。英語版の AV（欽定訳）は men、NEB（新英語訳）や NRSV（新改訂標準訳）でも people となっていて田川説を納得させる。ただし、マタイでは「食べた人は、女と子供を別にして、男が五千人であった」（5：21）となっていて、明確に女子供を除いた男だけの数にしている。五千人の供食の奇跡の予型とされる列王記下では「大麦パン二十個と新しい穀物」を百人の人々食べさせて、なお残ったとある（4：42–44）。なお、「予型」とは新約聖書の出来事が旧約において示されているとする説の概念。

実現不可能な願望を充足させたところに奇跡物語のメッセージが込められているのではなかろうか。満腹した人々が何千人であろうと、数個のパンではとても足りないほどの大群衆を意味するのであろう。要するに、この奇跡を可能にしたのがイエスであり、イエス自身が天からの賜物であるということではないだろうか。この奇跡物語は、ヨハネによる福音書の同じ 6 章で出エジプト記のマナと関連づけられたうえで（6：31-32）、「パンを食べて満腹した人々」に語られる「永遠の命に至る食べ物」、すなわち「命のパン」に続くのである――「わたしは命のパンである。…このパンを食べるならば、その人は永遠に生きる」（6：48–50）。さらに、この奇跡は聖餐と関連づけられる。食べなければ生きられない「必要な糧」（主の祈り）が聖体となり、愛の秘跡の媒体となる。

～ オルガン講習・感想文 ～

チャレンジし続けた１年間

法学部　４回生　**宮本　伸隆**

私は、１回生の頃に昼の礼拝での松原先生のパイプオルガン演奏に感動して以来、オルガン講習を是非とも受講したいと思っていました。しかし、授業などの関係で、なかなか受講することが出来ませんでした。３回生の夏に聖歌隊へ入隊してからは、礼拝や諸行事などでパイプオルガンの音色を聴く機会も増え、最後のチャンスである来年こそは絶対に受講すると決めていました。４回生になってまもなく、応募した結果、参加させて頂くことが出来ました。

オルガン講習は、新しい経験の連続でした。私は、エレクトーンとピアノも習っていますが、楽器の音色や仕組みが違うのは勿論のこと、演奏するにあたって、指づかい、タッチなどが異なるため、慣れるまで大変でした。特に、鍵盤を叩かずに押さえる弾き方や音を伸ばすために必要な指の置き換え、両足を使って足鍵盤を弾くことは、今までに経験がなかったため苦戦しましたが、松原先生の丁寧な御指導により、徐々に感覚を掴むことが出来ました。教わったことを活かし、最後まであきらめずにチャレンジし続けて、曲を仕上げられた時の喜びは、今でも忘れられません。

この１年、発表会だけでなく、礼拝、チャペル見学、オープンキャンパス等でも演奏させて頂きました。それは、人前で演奏することが得意だった私にとって、とても幸せなことでした。卒業までに残された時間はあと僅かですが、その間にも演奏させて頂くことになっています。卒業後、パイプオルガンを演奏出来る機会は滅多に無いと思います。最後まで全力で練習に取り組み、納得のいく演奏をしたいです。

パイプオルガンは、建物の大きさに合わせて個々に設計されているため、一つとして同じものはなく、桃山学院大学のチャペルにあるパイプオルガンの音色も、他では聴くことが出来ません。このように魅力ある楽器を演奏出来たこと自体、とても貴重な体験でした。興味のある人は、チャンスを逃さず、ぜひ挑戦して下さい。

最後になりましたが、いつも優しく丁寧に御指導下さった松原先生を始め、お世話になったキリスト教センターの皆様、礼拝や諸行事等で係わった多くの方々に感謝の意を表します。本当にありがとうございました♪

パイプオルガンと向き合って

国際教養学部　４回生　**林　千鶴**

「パイプオルガンを弾く」ということは、私がこの大学を選んだ理由の一つでもありました。まだ高校生の時、桃山学院大学の大学紹介パンフレットの中でオルガン講習があるということを知り、入学後の１回生の春すぐにキリスト教センターに申し込みに行きました。その１年間の講習を終えた時、私の中では充実感もありましたが、「まだまだこの魅力的な楽器に触れていたい、もっと色々な曲を弾いてみたい」と思うようになり、卒業までにはあと１度は講習を受けようと強く願い続けていました。

そして今年４回生になり、念願のパイプオルガン講習が再び受けられることになりました。ですが、過去に一度経験があるといっても、久しぶりにパイプオルガンに触れてみるとやはり両手両足が鈍っており、オルガン独特の指使いや足で鍵盤を弾くという動きは思うように進まず、最初はぎこちなくなってしまい、感覚を取り戻すまでが大変でした。ですが一度その感覚を思い出すと想像以上にスムーズに弾けるようになり、早速新曲へと取り組ん

でいくことになったのです。今年は、私の大好きな作曲家で、音楽の父とも呼ばれているバッハの曲を中心に取り組んでいたので、好きな曲を弾く練習の時間は本当に楽しく、音楽に浸れる時間は日常のかけがえのない大事な時間となっていました。

発表会本番ではバッハの「Concerto G-Dur」という、当時のバロック時代をイメージさせる様な固いリズムでテンポの良い、楽しい曲調のものを弾きました。

この曲はこれまで私が弾いてきた、しっとりとした流れの音楽とはまた違った曲調の音楽たったのでとても新鮮な気持ちで弾くことが出来ました。また、この曲の足の鍵盤はダブルペダルといって、2つの音を両足で同時にリズム良く弾かなければならない曲だったので非常に弾きごたえがあり難しかったです。ですがその分、両手と合わせてピタリと上手く弾けた時はとても嬉しく、「次も頑張ろう」という前向きな気持ちに変わっていきました。気付いてみればもう講習はあっという間に終わり、もうすぐ卒業間近となってしまいました。最後の1年間、パイプオルガンを弾かせて頂いて本当に幸せでした。晴美先生、これまで優しいご指導ありがとうございました‼

達成感と感動を得られるパイプオルガン講習

国際教養学部　3回生　**神野　亜沙美**

ピアノ経験もない全くの初心者である私が、なぜパイプオルガン講習に応募したのか。その答えは単純で、初めてパイプオルガンの音色を聴いたとき、その美しさと迫力に衝撃を受け一瞬にして魅了させられたからです。最初は受講が決まり浮かれていた私でしたが、練習が始まると厳しい現実が襲いかかりました。楽譜も読めず、左右で違うメロディーを弾くことができない私にとって、パイプオルガンは想像以上に難しいものでした。両手でメロディーと伴奏を弾くことだけで必死なのに、さらにペダルまで加わってくると、もう頭の中は混乱しっぱなしで、自分で何を弾いているのかもわからなくなるほどでした。あまりの難しさに自分には無理だと諦めそうにもなりましたが、「必ず弾けるようになるよ」と先生が言い続けて下さったことと、毎回の練習がとても楽しかったので、最後まで頑張れたのだと思います。下手な私が弾いても、パイ

プオルガンはいつも美しい音色を奏でてくれ、チャペル内に響き渡るあの瞬間が何とも言えず大好きでした。こんなに綺麗な音で大好きなジブリの曲を弾けたらな、とふと思ったのがきっかけで、最後の発表会で弾く曲を「アシタカとサン」に決めました。練習を重ねる度に少しずつ弾けるようになっていくのが嬉しくて、少しでも早く完璧に弾きたいと必死でした。発表会当日は緊張で少し間違えたものの、なんとか落ち着いて一曲弾き切ることができ、そのときの感動と嬉しさと達成感は、今でも忘れられません!!!

講習を終えて今言えるのは、パイプオルガンを弾くという貴重な体験ができて本当に良かったということ。パイプオルガンに触れるなんてなかなかできないことだと思うので、是非桃山にいる間に体験してほしい！と心から思います。

最後になりましたが、素晴らしい編曲とご指導をして下さった松原先生と、キリスト教センターの方々には本当に感謝しています。ありがとうございました。

パイプオルガンの音色

国際教養学部　３回生　**定　友里亜**

私がこのパイプオルガン講習を知ったのは、２回生の時にインドネシアワークキャンプに参加したためキリスト教センターをよく利用していた時に、パイプオルガン講習を知り、松平チャプレンに勧めていただいたからです。パイプオルガンはどこにでもあるものではなく、このチャンスを逃がすと一生経験できないのではないかと思ったので、受講することを決意しました。

私は小学生の頃までピアノを習っていましたが、弦楽器であるピアノの鍵盤と、空気を送り続けるために鍵盤を押し続けなければならないパイプオルガンの鍵盤とでは、全く弾き方も異なり、また、手の鍵盤の他に足にも鍵盤があるため、初めは感覚をつかむだけで精一杯でした。

このように演奏は悪戦苦闘の連続でしたが、受講の度とても不思議な音色のパイプオルガンに魅了され、オルガンに向かうことは忙しく余裕のない日常を忘れさせてくれるひと時でもありました。言葉ではうまく言い表すことができませんが、パイプオルガンの音色やパワーが体に入ってくる感じで心に響きしみ透ってくる感覚を得た瞬間が何度もありました。音楽を聞くこととは全く違った感動です。楽器には人を癒す力があるということを改めて私は強く感じました。うまく説明することができないので、これから挑戦をしてみようと考えている方には是非私と同じ経験をしていただきたいと思います。

講習の集大成の発表会には大好きなジブリの『千と千尋の神隠し』のテーマソング「あの日の川」を演奏することができました。いつもやさしく丁寧にパイプオルガンを指導してくださり、演奏曲の編曲も手伝ってくださったオルガニストの松原晴美さん、ありがとうございました。この場をお借りしてお礼申し上げます。また、松平チャプレンやキリスト教センターの職員さん、心配して発表会にかけつけてくださった南條健助先生や友達にとても感謝しています。

最後になりましたが、他ではできない貴重な経験と良き思い出をいただき、本当にありがとうございました。

パイプオルガンに触れて

社会学部　３回生　**番匠　祐貴**

私は昔ピアノを習っていたこともあり、またピアノが好きということもあったので、このオルガン講習を受講しました。本当は１回生の頃から受けたかったのですが、必修科目と被ったりして受講できず、また２回生の時も結局できず、３回生になって念願が叶ったという次第です。

ピアノとはタッチ感や演奏技術が違い、本当に苦戦しました。なにより足が動かなくて本当に一曲弾くことができるのかな、と焦っ

ていました。基本的に週１回の講習があり、空き時間に練習するというものでしたが、部活等で忙しかったこともありほとんど練習する時間を持てなかったのです。けれども最後の発表会に向けた曲を完成させることができ、胸をなでおろしました。もっと練習できていたらさらにレベルアップした演奏ができたのにな、と後悔の念があります。

できれば来年も受講して、もっと難しい曲を弾いてみたいなと思えるほどパイプオルガンに魅せられた一年間でした。

大学にチャペルがあるのにも関わらず、ほとんどの人がチャペルの存在を忘れているような気がします。確かに普段の生活にはなかなか馴染みのない場所だと思います。でも、折角この大学に来たのだからこの大学にしかない何かをしてみようとは思いませんか。もしこのように考えている人がいたならば、この「パイプオルガン講習」はうってつけだと思います。鍵盤楽器経験がない人は少し難しいかもしれませんが、少しでも経験がある方はとても良い経験ができると思います。（もちろん経験のない方も‼）

折角の大学生活を送るのであればその大学の良いところを余すことなく楽しまないともったいないと思います。みなさんも楽しい大学生活を送るためにもさまざまなことにチャレンジしていってください。

オルガン講習を受講して

経済学部　３回生　**樋口　真帆**

私は、この大学にパイプオルガンの講習があると知って是非やってみたいと思いました。１、２回生の時は時間割の関係で受講することができなかったので今年受講することが出来てとても嬉しかったです。以前から、音楽の授業や教会の映像などでパイプオルガンを知り、その壮大で独特な音色はとても魅力的に感じていました。またとても高価な楽器であるし、教会や大きなホールなど決まった場所でしか弾くことの出来ないものなので弾いてみたいと思う楽器の一つでした。なので、毎週のレッスンがとても楽しみだったし、少しずつ弾けるようになっていくのがとても嬉しかったです。私は小さい頃からピアノを習っていたので手の方はなんとか弾けるのですが、足は全くやったことのないことだったのでとても難しくて苦戦しました。しかし、足を入れて演奏するととても豪華な曲になるのでこの足鍵盤こそがオルガンの魅力なのだろうなと思いました。

オルガン講習を受けている中で、チャペルの礼拝や小学生の見学で演奏させてもらう機会がありとてもいい思い出になりました。特に小学生の見学は演奏する前に、オルガンの説明をするのですが、聞いている小学生達が理解できるように説明できているのか不安もありましたが、演奏すると大きな音やその音色に感動している子もちらほらいたのでオルガンの魅力を少しは伝えられたかなと思いました。たった１年という短い時間でしたがこんな素敵な楽器を演奏することが出来てほんとうによかったと思っています。また、もう少し練習してもっといろいろな曲が弾けるようになりたかったなとも思います。あまり演奏する機会のない楽器ではありますが、もしそのような機会があればまた演奏したいと思います。

最後になりましたが、オルガニストの松原先生、チャプレン、キリスト教センターの方々ほんとうにお世話になりました。ありがとうございました。

成長のド・レ・ミ

国際教養学部　３回生　**東道　捺希**

私がオルガン講習を受けることになったきっかけは、友人が私にオルガン講習を受けようと思っていると話してくれたからだ。友人の話を聞くまで、オルガン講習の存在があることすら全く知らなかったのだが、その話を聞いた途端「私も参加したい！」と強く思った。私は小学生のころ、エレクトーンを習ってい

た。特別にピアノやエレクトーンを習いたいと思ったわけではないのだが、母は女の子ができたら習わそうと決めていたみたいだった。音楽は嫌いではなかったのだが、練習することが大嫌いだった。練習をしていかないから上達するわけはなく、先生にいつも怒られていたのをよく覚えている。どんどん練習にも行くのが嫌になってしまい、やめてしまった。大きくなるにつれて、練習もせずに、たいして弾けもしないままやめてしまったことに後悔を感じていた。

だから今回、友人がオルガン講習のことを教えてくれたときに、参加したいと思ったのだ。また貴重なパイプオルガンを弾くというのは、今後私の人生では経験することのできないことだとも思ったので今回の参加を決めた。ほとんど未経験にも等しい私に対して、優しく丁寧に教えて下さった先生のおかげもあり、練習はとても楽しかった。時間が空いたらキリスト教センターの端っこで練習して、疲れたら外の景色を眺めながら休憩する。いつのまにかそこが大学内での一番お気に入りの場所になった。発表会の曲も、私が大好きなジブリを弾くことができて、本当によかった。パイプオルガンの音も本当に大好きになったし、昔なげだしたものを、ほんの少しだけだが、やり遂げることができたのもうれしかった。ただ、自分の出来は全く納得いかない結果だった。もっと練習すればよかったと思ったし、もう一度、今度はもう少し楽譜を長くして練習したいと思った。春休みにでもジブリの楽譜を買って、家で練習したいと本気で考えている。

パイプオルガンとの出会い

国際教養学部　２回生　**村川　勁剛**

私がこのパイプオルガン講習のことを知ったのは、入学前でした。桃山学院から届けられる「アンデレクロス」を見て、入学したら必ずこの講習を受講したいと思っていました。私は幼いころから音楽が好きでピアノやエレクトーン、クラリネットなどの楽器を経験したことがあり、新しい楽器に挑戦することをとても楽しみにしていました。パイプオルガンという楽器に触れられる機会など、またとないチャンスだと思い２回生の春から受講させていただくこととなりました。

パイプオルガンの奏法は自分自身が経験してきたエレクトーンの奏法と大きく異なり、最初のころはとても戸惑うばかりでした。基礎から教えていただき、少しずつパイプオルガンという楽器にも慣れ、向上心を持ち始めました。この講習を受講するまで、しばらく音楽から離れていたので、毎日毎日楽譜に向き合って練習していた頃の気持ちが私の中に強く蘇り、今新しい楽器を練習しているという新鮮な気持ちとともに練習に励むことができました。

しかし、秋学期に入り、少し私生活が忙しくなりパイプオルガンの練習が疎かになってしまいました。そうこうしているうちに、修了発表会がもう目の前にやってきていました。発表会に向けて練習していた曲がありましたが、お客さんに聞いてもらえるような出来栄えには自分の練習量は至らず、春学期に練習を詰めたカノンを演奏することにしました。

レベルは下げたものの、聴きに来てくれる人たちがよかったと思えるような演奏をしようとそれからはカノンを集中して練習しました。本番を迎え、たくさんの人が聴きに来て下さりました。他の講習生の演奏からもすごく刺激をもらいました。春から練習してきたパイプオルガンを大勢の人の前で弾くことは初めてですごく緊張しました。でも、それ以上に教会に響き渡る音色を奏で、お客さんたちとともに音楽を分かち合える喜びを改めて感じました。

パイプオルガン講習を受講し、松原先生の温かい指導のなかで、音楽の素晴らしさ、更なる向上心、音楽で感動を与えられるということ。たくさんのことを教えていただきました。これからも音楽を続けていく者として、このパイプオルガンとの出会いを大切にし、常に音楽を愛する新鮮な気持ちで人々に感動を与えられるような演奏をしていきたいです。

パイプオルガンと私

経済学部　3回生　**山本　麻梨子**

人生でとても貴重な経験が出来ました。それは、桃山学院大学に入るまでパイプオルガンは、テレビで見るぐらいだったからです。しかし、入学式の時にパイプオルガンを生で見て感動し、また講習があると知って受講しないともったいないと思いました。しかし、授業の時間割とアルバイトで受講するタイミングが無く、やっと三回生で受講できました。

難しいと思って受講に臨んだのですが、本当に難しく頭が二つほしいと思ったほどです。手と足をバラバラに動かすので、「あれ？今、何をしているんだろう？」と思うことが多かったです。しかも、足を隣に動かすだけで訳が分からなくなるほどでした。手のほうもピアノを高校の授業で習ったぐらいだったので、大変でした。また、足と手を同時に鍵盤から離すのが苦手で、手を鍵盤から離していても足を離すことを忘れていて、音が鳴ったままの時やその逆もよくしてしまい、笑うほどでした。しかし、松原先生に優しく教えて頂けて十二月の発表会で、失敗しましたが無事最後まで弾くことが出来ました。また、他の受講生がとても上手で感動し素敵な発表会に参加でき嬉しかったです。

このオルガン講習は、本当に貴重な体験でした。触れることなどないと思っていたパイプオルガンを弾くことが出来たからです。また、何かに挑戦することが苦手であった私にとっても良い経験でした。これからも、このオルガン講習のように今まで経験したことの無い様々なことにチャレンジしていきたいと思います。

◇ 編集後記 ◇

「SEQUIMINI ME」第42号ができあがり、ご寄稿いただいた方々に心から感謝いたします。このチャペル・ニュースを通して、新入生の方々のみならず在校生、教職員の方々にもチャペルへの興味を持っていただければと願っております。

（本学　チャプレン　司祭　ヤコブ　松平　功）

「SEQUIMINI ME」桃山学院大学チャペル・ニュース　第42号

2012年3月発行

発行人
編集人　松平　功

発行所　桃山学院大学チャペル（聖救主礼拝堂）
〒594-1198　大阪府和泉市まなび野1番1号
TEL　0725-54-3131

桃山学院の「キリスト教精神」

「自由と愛の精神」

桃山学院の学院章には、“SEQUIMINI ME”（我に従え）という言葉が刻まれています。それはイエスの弟子アンデレがイエスに従ったように、「自由と愛の精神」をもっていきることです。使徒パウロが書いています。「あなた方は、自由を得るために召しだされたのです。ただ、この自由を、肉に罪を犯させる機会とせずに、愛によって互いに仕えなさい。」（ガラテヤの信徒の手紙５章13節）

自由には他者への愛と責任がともないます。「自由」とはひとりの人格と主体性を尊重すること、「愛」とは互いに仕えあいながら他者と共に生きることです。この「自由と愛の精神」は、単にキリスト教の立場だけでなく、すべての人間が一致しうる普遍的な理念であり、人類共通の目標です。

人間のそのような可能性を開花させながら、高い理想をめざしてチャレンジし続けていくこと、それこそが桃山学院の一世紀を超える伝統が目指そうとする「キリスト教精神」であり、「世界の市民」への道なのです。

桃山学院大学チャペル（聖救主礼拝堂）

〒594-1198　大阪府和泉市まなび野１番１号
TEL　0725-54-3131
FAX　0725-54-3210